

スポーツ大学1年生は転機をどのように捉えているのか

豊田則成¹⁾

What Do Freshmen in a Sport College Think About Their Turning Point?

Norishige TOYODA

Abstract

In contrast to quantitative methods, the present article uses a qualitative research method, based on Life Line analysis and the simplified Grounded Theory Approach (GTA). According to the above research question, data was collected from 7 freshmen in a Sport College in semi-structured interviews and analyzed by classifying them into categories. Through these steps, four hypothetical ideas on structure, formation and the meaning of turning point were revealed. The results suggest that freshmen in a Sport college consider the core of their turning point to be deeply related to 1) change of self, 2) expansion of one's behavior, 3) change of one's relationship, and 4) reflection of oneself.

Key words : Turning Point, Freshmen in a Sport College, Qualitative Research Method, Grounded Theory Approach (GTA), Semi-Structured Interview

1) 生涯スポーツ学科

はじめに

人は自分の過去を振り返るとき、様々な出来事を経て、現在の自分が成り立っていることに気づく。それは、大きな成功や失敗であったり、人との出会いや別れであったり、友人との語り合いであったり、様々なきっかけによって、時に自分や他人に対する見方や捉え方を大きく変化させ、自分を取り巻く世界の全てを異なった視点でみることさえできるようになる。そのような個人にとって大きな転換を、ここでは「転機 (turning point)」と呼ぶ。杉浦 (2004b) は、「転機の経験を通じて人は成長する」とし、発達心理学領域における転機という視点の有効性を指摘している。とりわけ、個人が「どのように」転機を経験し、それによって「どのように」成長を促したかは、非常に興味深い関心事であることは間違いない。そもそも転機とは、個人の人生における意味あるライフイベントを契機に、多かれ少なかれ生活構造の転換を個人に迫る (Levinson, 1978)。その体験様式は、個人によって異なることは自明であるが、そこには、共通したプロセスや発達課題を見出すことができる (杉浦, 2004b; 豊田・中込, 2000)。

杉浦 (2004a) は、スポーツ選手の転機についての語りの特徴として、自己転換の語り、空白期間の語り、アンカーとしての出来事の語り、の3点を挙げ、それがスポーツ選手の心理的成長にどのような意味を持っているのかを検討した。その結果、転機の経験を語りによって肯定的に意味づけることで、現在の自己を肯定的に捉えたり、競技するにあたっての信念を容易に思い出ししたりすることが可能となり、そのような肯定的な自己や明確な信念に基づいて行動できるように変わっていくことを導き出した。その一方、今日までに、スポーツへの参加促進・離脱防止の観点からスポーツキャリアパターン (参加・不参加・継続・離脱・復帰) を比較・検

討した研究 (筒井ら, 1996) や、発達段階別にスポーツ実践者と非実践者を比較した研究 (加賀ら, 1992; 石井ら, 1994) は見受けられるものの、スポーツ経験がもつ意味やその変化について検討した研究は少ない (中込, 2004)。

ちなみに、本研究のように、個の認識や関係の変化、それに関連したプロセスを扱う取り組みには、従来の理論をベースとした仮説検証型の方法よりも、ボトムアップ的に仮説を構築していく仮説生成型のアプローチが適している (Flick, 1995)。先にも触れたが、「スポーツと心」を扱うスポーツ心理学領域においても、個の「意味づけ」に着目し、アプローチすることの必要性は、かねてより指摘されてきた (中込, 2004; 豊田, 2001; 豊田・松田, 2003; 豊田・中込, 2000)。しかしながら、了解的な解釈を試みる臨床心理学的アプローチの他は、Kirk & Miller (1986) が指摘する質的データの「確実性 (dependability)」を保障できているとは言い難い。質的データの代表性や客観性を確保するために、さらなる手法の精緻化は不可欠であろう。

また、本研究では、特に、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach: 以下GTAと略す) を参考とし、分析を行った。GTAの中には、いくつかのバージョンがあるが、その共通する基本的手続きは、データの収集、概念構成、理論的サンプリングと継続的比較分析、理論的飽和 (theoretical saturation) による仮説生成、とされる (Strauss & Corbin, 1990)。この方法には、得られたデータの共通性に基づく最大公約数的な部分と、個別性に基づく最小公倍数的な部分を同時に扱えるという特徴がある。すなわち、個人にとっての意味づけを取り扱えることが最大の利点といえる (原田, 2003; 水野, 2004)。

加えて、本研究は、「語り研究」と位置づけることもできる。そもそも質的研究における「語り (ナラティブ: narrative)」とは、

個性記述的データであり、個性・一次的な性質が強い。とりわけ、時間軸の中に布置する「語り」は刻一刻と変化し、そこに表れる個の意味も、いわば流動的である。しかしながら、その変化にこそ、個人の内的事実が含まれると著者は強調したい。

そこで、本研究では「スポーツ大学1年生は、これまで経験してきた転機をどのように捉えているのか」というリサーチ・クエスチョン（Research Question: RQ）を設定し、質的にアプローチした。すなわち、インフォーマントから得られる転機についての語りに着目し、その特徴をカテゴリー化し、発展継承可能な仮説的知見を導くことを目的とした。

方 法

インフォーマント：インフォーマント（Informant：情報提供者：以下Inf.と略す）は、スポーツ学部1年生15名（男子：8名、女子7名）。本論では、取り上げたトピックの類似性と語りの内容、男女比を考慮したうえ、このうちの7名（男子：4名、女子3名）のInf.に注目した。

調査時期：2004年6月中旬から7月下旬

手続き：インタビューに先立ち、予めライフライン（河村, 2000：Life Line：以下LLと称す）を実施し、これまでの自分の歩みを振り返る作業をしてもらった。そして、それを参考にしつつ、1人あたり50分程度（1対1形式）の半構造化インタビューを実施した。インタビュー内容については、Inf.の承諾を得て、ICレコーダーに録音し、その後、筆者がテープ起こしを行い、逐語を発話データとした。

インタビュー内容：インタビューの内容は、先に示したLLを参考にしながら、「あなたがこれまでに経験した転機について話をしてください」という質問に端を発し、その出来事に関連する事柄について詳しく述べてもらった。インタビュー中には、予め準備して

おいた質問項目をガイドとして用い、流れに応じて質問する内容や順番は柔軟に変化させた。特に、注意を払ったのは、Inf.の「話の腰を折らないこと」であり、時間の許す限りInf.の発話を豊富に得るよう努めた。

また、調査にあたっては、倫理的問題をクリアするために、研究の趣旨と録音した音声やそれを起こした逐語は本研究の目的以外には使用しないこと、引用する場合には予めInf.の承諾を得ることはもとより、個人を特定できないよう若干の加工を施すことを丁寧に説明し、Inf.の快諾を得た。

分析の手続き：以下のような分析を行った。トピックの抽出：それぞれのInf.が転機と位置づけるトピックの部分を抽出した。特に、本論においては、LLを付し、参考資料とした。切片化：転機についての発話データの中で、それぞれが意味を持つと捕らえることのできる部分にアンダーラインを引いた。コーディング：アンダーラインを引いた部分を抽出し、その内容を表す単語や短い語句（コード）を付した。カテゴリーの生成：コーディングされたデータを比較し、類似したものに新たな名前を付してカテゴリーとした。さらに、同様の手続きから類似したカテゴリーをまとめて、新たなコードを付してカテゴリーグループとした。カテゴリーの精緻化：カテゴリーの内容やカテゴリー同士の関連に基づき、再編成を繰り返した。ただし、本研究の場合、と の手続きの明確な区別は困難といえる。なぜならば、両者は同時進行で遂行されるという特徴を有している（木下, 2003）。仮説の生成： の手続きを進める中から、発展継承可能な仮説を生成した。

また、カテゴリー生成における「確実さ（dependability）」を高めるために、本研究では、可能な限りデータ記述を整理し、分析のプロセスを詳述するよう努めた。

結果と考察

ここでは、1) LLと転機の語り、2) 基礎的なカテゴリーの生成と精緻化、という2つの観点からまとめた。

1) LLと転機の語り

ここでは、Inf.である7名が記入したLLと彼らの転機についての語りを紹介する。ちなみに、プロフィールには性別と調査時点での年齢、そして、本人が取り上げた転機のタイトルを付した。また、発話データの中にあるInter.は、インタビュアー（Interviewer）である著者を意味している。

Inf. A（男）18歳「友人との出会い・マネジャー転身」(Figure 1)

Inter.：スポーツを始めたきっかけというのはいつ頃のことですか。

Inf. A：あの、一番最初、元を辿れば、(中略) 転校した小学校で、《友人の名前》っていう奴がいたんですけど、(中略) スポーツ やっていた 割りには、僕は内向的だった んですよ。(中略) みんなは、外で遊んでいた ときに、ひたすら読書 していました。(中略) 体がデカかった ので、なんかちょっと違う っていうか、それで、《友人の名

前》がジュニアバレーをやっていた んですよ、小3からずっと。で、《友人の名前》 とは、その小3のころから、最初はちょっと かい出してきた んですよ。俺に。そこから だんだん仲がよくなって (中略) 《友人の名前》 もずっとバレーやれ、バレーやれ っていった んですよ。でもなんか、いいわ、いいわって断ってたんですけど、中学校あがったときに、その、親もお前はどう考えても肥満体型 やから、なんか絶対スポーツ やれ っていわれて いた んで、んじゃ、《友人の名前》 おるし、バレーしよう かって ことに。(中略) だから、《友人の名前》 があら なかったら、スポーツ やって なかった か もしれ ませ ん。結局、そいつとは、小学校、中学、高校 と同じ 学校 やった ん です。

Inter.：マネジャー転身ってあるけど、その辺詳しく教えてくれる。

Inf. A：怪我から復帰してきたんですけど、まだまだバレーなんてとても出来なかった。(中略) ある日、監督に、お前、違った形でチームに貢献せいで言われて、マネジャー にな れ て 言 わ れ て、(中略) ああ、もう俺も 終わり か な っ て、ショック は 大 き か っ た ん で す け ど、あの、まあ、そ う い う 道 も あ る か な っ て い う ふ う に、そ う い う 仕 事 も あ る わ な っ と、まあ、で、マ

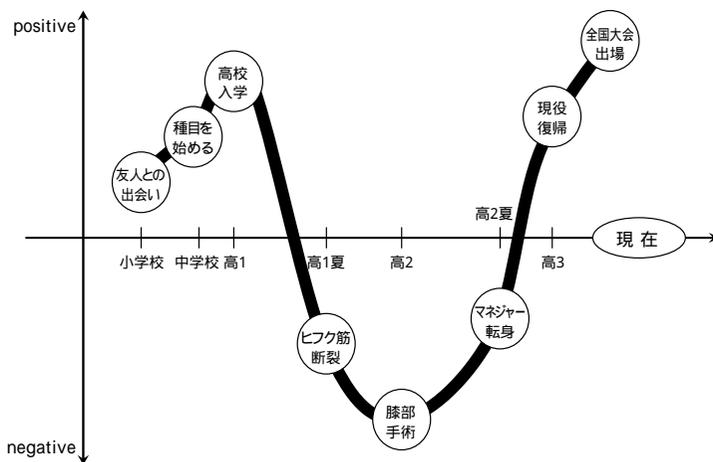


Figure 1 Inf. Aのライフライン

ジャーに轉身したことも、まあ、好い事やったんですけど、気持ちの中では、まあこれも遣り甲斐はあるだろと思ったんですけど、(中略)怪我して、リハビリして、これぐらいの時期から普通の生活も、階段もまあまあ普通に上り下りできるし、そういう生活ができるようになっていたんで、(中略)だから、その、全く面白くない期間でした。

Inter.: 辞めようとは思わなかったの。

Inf. A: それはなかったですね。(中略)他のことには、全く興味がなかったんですよ。(中略)その、俺の中ではもうバレーをとって、高校に入学してきたんですよ。そして、バレーで選んだ高校でバレーをやめるなら学校辞めるのに、俺、等しいなって思ったんですよ。だから、もう、そんなん、辞めたいとも思いませんでした。(中略)何かチームに貢献できることがあるって、自分に言い聞かせて。(中略)《友人の名前》が来て、ああ、やっぱり、お前貢献しとるぞって言われて。終わってから、俺も、そう思えるようになりました。

Inf. B (男) 18歳「干されてキャプテンに」
(Figure 2)

Inter.: 干されてたってあるけど、詳しく教

えてくれる。

Inf. B: いや、もう、1年生から試合に出ていて、で、3年生が引退してから、もう自分も余裕が出てきたみたいない感じで、自分ばかりが思っていて、すごい天狗になっていて、でも、試合に使ってもらってたんで、ボールとられても追いかけて、ボール持ったらドリブルして、とられて、また、追いかけてみたいない感じで繰り返して、何回も怒られていたんですけど、もう聞き流して、(中略)じゃあって先生がぶち切れて、遠征の時に、お前はチームに必要なって言われて、で、後から後悔したんですけど、3ヶ月ぐらいサッカーをさせてもらえなくて、練習行っても見てもらえなくて、紅白戦も出れなくて、試合に行ったらラインズマンさせられて、もう、公式戦があってもメンバーにも入れなくて、そういう時期にサボったりもしたんですけど、(中略)自分でぐれていて、そういう時期でした。

Inter.: そこから、どうやって改心していったの。

Inf. B: ええ、その時に先生に言われたのは、お前は別にこのままでもいいけど、俺はずっと見てるって言われたんで、で、ちょっとずつ自主練もしながら、練習の中でも意

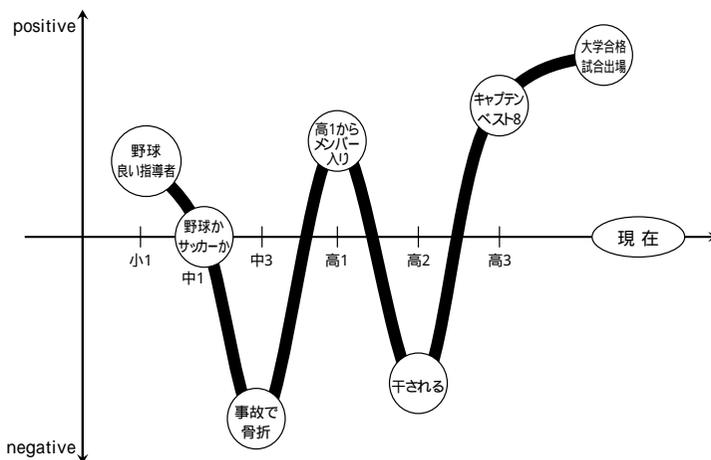


Figure 2 Inf. Bのライフライン

識しながら、していくうちに先生も見えてくれて、新人戦の時期に差し掛かって、一個上の学年の新人戦で、インターハイまでの間に、自分を磨いたっていうか、そういう時期で、インターハイで試合出れるようになって、(中略)そこから、自分がチームに必要とされる人間になりたい、信用されたいっていうのが強くなって、そこから、我慢して、改心したって感じですね。

Inter.: それから、キャプテンになるよね。選ばれたときの気持ちは。

Inf. B: 先輩にもずっとやれって言われていて、いや、でも、干された時期もあって、やっぱり皆信用してないですよみたいな感じで言ってたんですけど、だったら、変われよって言われて、で、立候補したんです、もう、俺やりますって。(中略)その時には、自分の中ではもう、チームを強くさせたいし、自分ももっと強くなりたいと思ったんで、キャプテンすることで、自分も強くなれるし、先生も見返してやりたいういう気持ちもあって、キャプテンやるって言って。(中略)でも、一日一日が手を抜けなかったです。自主練とかでも、朝、しっかりやったり、筋トレなんかもサボってた奴もいたんですけど、それまでは、そいつらのこと、バカにしてたんですけど、自

分もそいつらと積極的に交わって、そうすりゃ付いてくると思ったんで、で、週一回ミーティングを自分たちで開いて、先生がいなくてもミーティングしたり、先生のいない時でも練習集中させてやろうみたいな、(中略)そんなこんなやっているうちに、皆、俺に付いてきてくれるようになりました。(中略)なんか、それからですね。しっかりしなくちゃ、しっかりしなくちゃって思うようになったのは。

Inf. C (女) 18歳「顧問の死去」(Figure 3)

Inter.: つらい体験があったって書いてあったんだけど、詳しく教えてくれる。

Inf. C: 顧問の先生ですね。ええ、黒い、面白い、でっかい人でした。人間的には、性格的には、頼れる人でしたね。普段、自分から話かけてくれる人です。教え方もうまいし。(中略)前の日までは普通に練習とか、一緒にやっていたんですけど、その次の日に、姿がなくなって、で、全校集合があって、その時に聞いて、突然で、みんな大泣きで、理由が、その自殺っていうのを聞いて、ちょっと納得いなくて、遺書もあったみたいで、それをちょっと見せてもらったんですけど、はい。有名な先輩を指導して、日本一にさせたっていうのがあっ

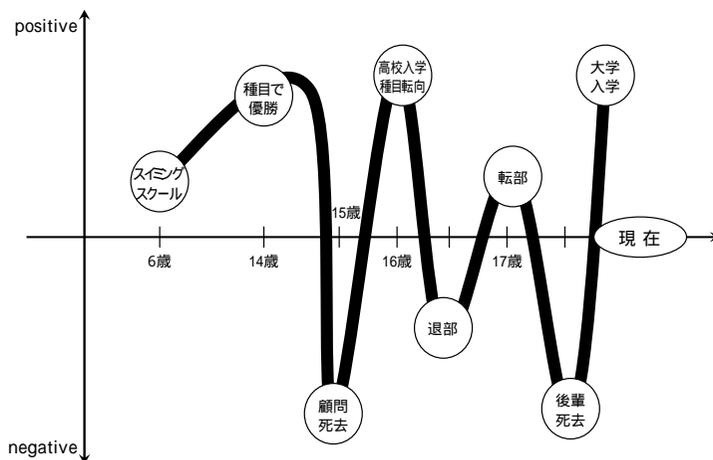


Figure 3 Inf. Cのライフライン

て、それで、全てやることは終えたって感じで、亡くならはったのかなって思っ
て。はい。中3の頃です。(中略)とても好きな先生だったし、絶対、先生の分までがんばろうと思ったし、先生に認めてもらえる選手になりたいと思ったし、(中略)体育の教員になりたいと思出したのもその頃からなんです。(中略)ああ、かっこいいって思われるような体育の先生ですね。何でもできるみたい。先生がそんな感じだったんですよ。やっても何でもできる人っていいなって。先生は、何でもできて、惚れ惚れしました。あんなふうになりたいなって、いつも思っていました。

Inf. D (男) 18歳「キャプテンに指名されたこと」(Figure 4)

Inter.: 部活動に、一生懸命取り組んでいて感じかな。

Inf. D: あ、でも基本的に、自分でがんばってたと思うのは、やっぱり高2のちょっとキャプテンになった時から、もう真剣にやり出したくらいです。それまではやっぱり、遊びというか、あんまり真剣にやっ
ていなくて、それで、自分も大分変わった
と思うんですよね。(中略)高校時代に、もうまともな後輩ができて、で、先輩もあま

り尊敬できるような先輩もいなくて、それで、やっぱり、先生とかもいなくて、自分たちで部活を作っていかなくちゃいけなくて、それで、やっぱり後輩の前で恥ずかしいことはできないなと思って、で、やっぱり、キャプテンに指名してもらった以上、やっぱり自分のすべきことはやらないとだめだし、皆にやっぱりそういう示しとか、つかなくなるんでもう本当に真剣にやらな
だめだなと思った。

Inter.: 一年ぶりに久しぶりに部活に行って、そこでキャプテンに選ばれたってこと。

Inf. D: はい。やっぱり、先輩は大きい目で見えていて、やっぱり僕が一番中心になることができて、やっぱり、言うことも言えるし、判断してくれたと思うんで、それで、僕もすごい全部改めなきゃなって思って、
すごい反省して、こころ入れ換えようと思いました。

Inter.: 選んでくれたのは、喧嘩をした先輩だったの。

Inf. D: それまで喧嘩してたんですけど、僕、やっぱり、間違っていると思ったら、謝りたくなって。なんでかっていうと、その時に、やっぱり喧嘩したことも、先輩のことをよく考えていくと、自分もやっぱり、少
し、何かいろいろ言い方もあったらうし、

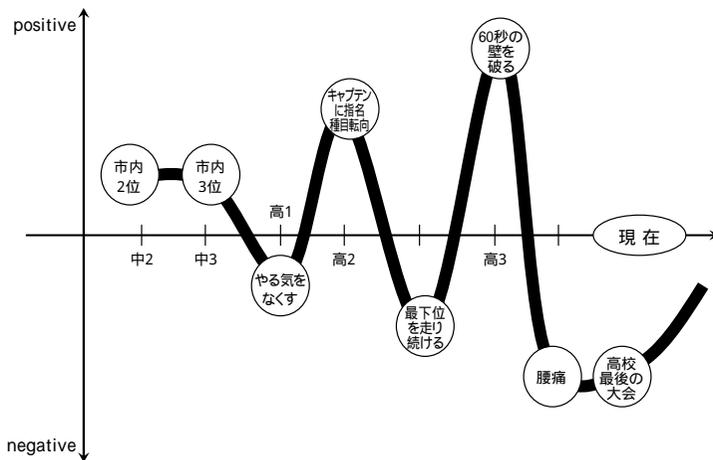


Figure 4 Inf. Dのライフライン

すごい、悪いことしたなって思って(中略)
 それで、謝って、そこから話し合いが多くな
 ったんですよ。そこから、やっぱり、い
 ろんなことを話せる先輩になって、すごい、
 仲良くなったっていうか、すごい信頼でき
 る関係になりました。

Inf. E (男) 18歳「退部の危機」(Figure 5)

Inter.: 退部の危機ってあったんだけど、
 これはどんな感じなの。

Inf. E: これは、高1の時なんですけれども、
 クラスの友達ともめ事があって、ちょっと
 喧嘩みたいになったんですけど。要は、手
 を出しちゃったんです。それが、部監督の
 耳に入って、それで、そういう手を出すこ
 とに関しては、厳しい監督だったんで、(中
 略)それで部屋に呼び出されて、退部だと
 か言われたんですけど、すごい謝って、反
 省して、それで頭を坊主にして、みんなの
 前にも立って謝って、それで、一応、皆に
 も認めてもらったんで、退部はなくなった
 んですけど。(中略)先生に、謝りに行っ
 たときは、まず最初に自分がやったこと
 について聞かれて、それから1時間くらい説
 教されて、ずっと謝り続けていて、自分の
 部活に対する気持ちとか全部しゃべって、
 それで最後に何とか、少しは認められるよ

うになって、まあ、許してもらったって感
 じですね。(中略)その後は、私生活とか
 でも、なんか、ちょっとでも変なことす
 ると先生の耳にすぐ入るぞとか、そういう感
 じ言われていたんで、(中略)その、退部
 になりそうなときにも毎日私生活もきっち
 りと、遅刻もしないようにしてました。(中
 略)それから、自分がしっかりしてきたよ
 うに思います。

Inf. F (女) 19歳「受験失敗」(Figure 6)

Inter.: 大学、一回目の受験は全部ダメだっ
 たの。

Inf. F: 悔しかったですね。とにかく、体育
 系の大学に行きたかったんですよ、競技も
 強いし、環境も良いし、でも、受けて、も
 しダメだったら、もう違う学科っていうか、
 違う進路を選ぼうと思って、(中略)あと
 は福祉に興味があったので、福祉系の大学
 を受けて、それで両方ともダメでした。も
 うガックリやった。

Inter.: 一年間の浪人生活はどうだった。

Inf. F: だから、今まで、ずっと決められた、
 あの環境っていうか、その、学校に行っ
 たり、するのしか知らなかったんで、もう一
 日を自由に使えるっていうか、そういうの
 がすごく新鮮だったっていうか、それで、

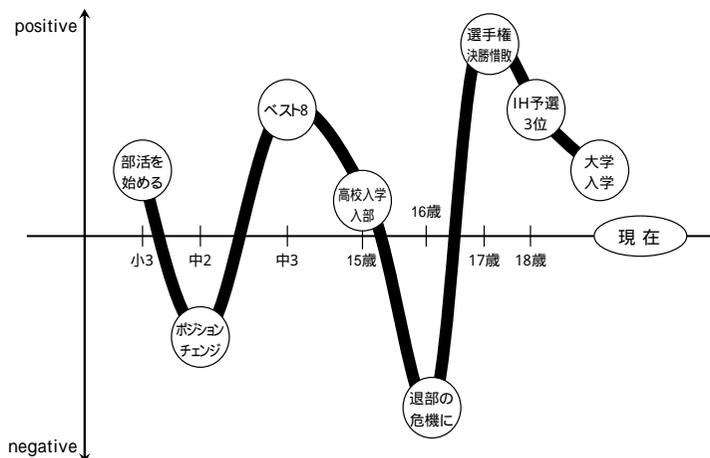


Figure 5 Inf. Eのライフライン

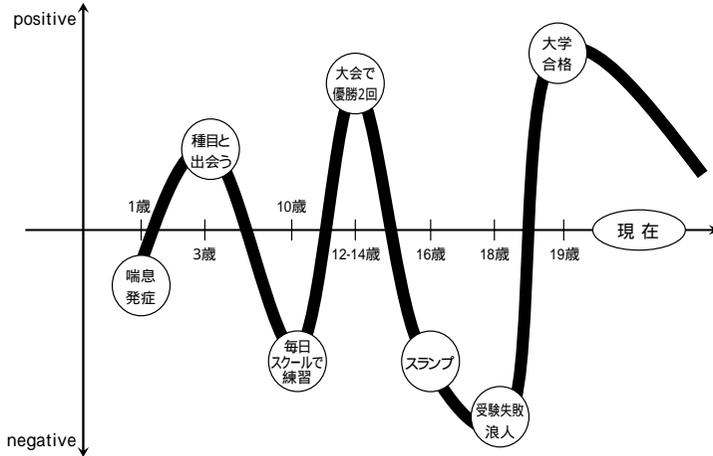


Figure 6 Inf. Fのライフライン

まあ、自分の好きなことを勉強したり、バイトしたりして、(中略) 気持ちの整理がついたっていうか、それで、色々考えることもできるようになりました。(中略) 今になって、浪人しておいて良かったなと思う。まあ、受かれば、受かる方がいいんですけど、まあ、落ちて浪人したということが、結果的に好い方に行っているとは思いますが。(中略) 物事を落ち着いて、しっかり考えられるようになりましたから。(中略) 少しは大人になったんちゃうかな。

(Figure 7)

Inter.: 生徒会に入ってるけど、この頃のことを詳しく教えてくれるかな。

Inf. G: これも自分から進んで入ったわけじゃないんですけど、あの、生徒会の先生が、ガッて肩つかんで、私、何したかなって思ったんですけど、お前、ちょっと生徒会長やるかっていわれて、ああ、ちょっと勘弁してくださいって言って、その場では勘弁してもらって、それで俺はお前がいいと思うって言われたんですよ(中略) すごい言われたんで、先生、私のこと、そこまで考えてくれてるんだと思って、私もちょっ

Inf. G (女) 18歳「生徒会とスランプ」

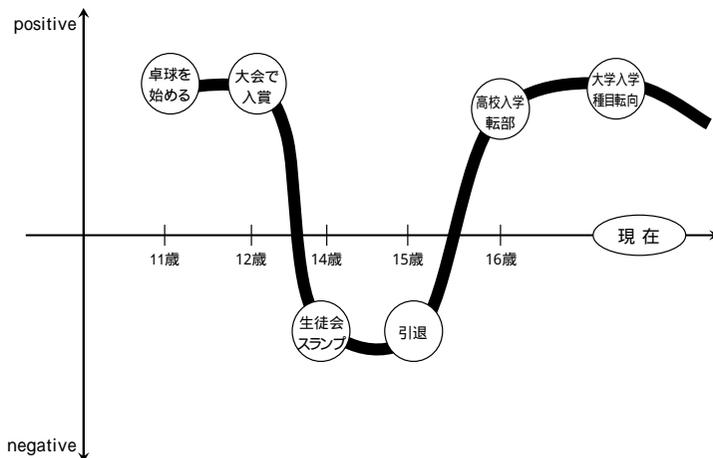


Figure 7 Inf. Gのライフライン

と考えて、(中略) やっぱり、立候補することに決めたいですよ。(中略) 生徒会長って、やっぱ変ですよ。何が楽しかったかっていうと、行事は、やっぱ、なんか、自分が生徒会を動かしている感じがして、何かと協力してくれる人もいるし、生徒会内の人間関係で悩んだりしましたが、遣り甲斐はありましたね。はい。コツコツやったことが行事とかで成功したときは、めちゃくちゃ感動ありました。

Inter: 同じ時期に、少しラインに落ち込みがあるみたいだけ。

Inf. G: これは、スランプなんです。(中略) 生徒会、やっているうちに卓球の方が疎かになってしまって、なかなかスランプから抜け出せなかったんですけど、(中略) で

も、コツコツやることを生徒会で学んだんで、やっぱコツコツやり続けて、それがきっかけかなんかで、スランプを脱出したんですよ。それで、ずっと調子が良かったんですよ。(中略) それで、最後の大会もずっと調子が良かった。でも、この時期のスランプがなければなって悔いが残っているんです。

2) 基礎的なカテゴリーの生成と精緻化

ここでは、スポーツ大学1年生が、これまで経験してきた転機をどのように捉えているのかを理解するためのカテゴリーを生成した。

まず、はじめにアンダーラインを施し切片化した語りにそれぞれコード(合計41個・以

Table 1 発言内容とコーディング

Inf.	トピック	コード名(No.)	発言の内容
A	友人との出会い	性分の自覚(1)	スポーツやっていた割りには、僕は内向的だったんですよ。
		友情の形成(2)	《友人の名前》とは、その小3のころから、最初はちょっかい出してきたんですよ。俺に。そこからだんだん仲がよくなって
		体験の共有化(3)	んじゃ、《友人の名前》おるし、バレーしようかってことに。
		重要な他者の認知(4)	《友人の名前》がおらんかったら、スポーツやってなかったかもかもしれません。
	マネジャー転身	挫折体験(5)	マネジャーになれてと言われて、(中略) ああ、もう俺も終わりがなくて、ショックは大きかったんですけど、
		マイナス思考(6)	だから、その、全く面白くない期間でした。
		強い信念(7)	俺の中ではもうバレーをとって、高校に入学してきたんですよ。そしたら、バレーで選んだ高校でバレーをやめるなら学校辞めるのに、俺、等しいなって思ったんですよ。だから、もう、そんな、辞めたいとも思いませんでした。
B	干されてキャプテンに	有頂天の自覚(9)	すごい天狗になっていて、
		叱責による反省(10)	先生がぶち切れて、遠征の時に、お前はチームに必要ないって言われて、で、後から後悔したんですけど、
		マイナス思考(11)	3ヶ月くらいサッカーをさせてもらえなくて、練習行っても見てもらえなくて、紅白戦も出なくて、試合に行ったらライズマンさせられて、もう、公式戦があってもメンバーにも入れなくて、そういう時期にサボったりもしたんですけど、(中略) 自分でぐれていて、そういう時期でした。
		支援的関係(12)	お前は別にこのままでいいけど、俺はずっと見てるって言われたんで、
		積極的関与(13)	自分がチームに必要とされる人間になりたい、信用されたいっていうのが強くなって、そこから、我慢して、改心したって感じですね。
		宣言的関与(14)	だったら、変われよって言われて、で、立候補したんです、もう、俺やりますって。
		チームメイトへの働きかけ(15)	一日一日が手を抜けなかったです。自主練とかでも、朝、しっかりやったり、筋トレなんかもサボった奴もいたんですけど、それまでは、そいつらのこと、バカにしてたんですけど、自分もそいつらと積極的に交わって、そうすりゃ付いてくると思ったんで、で、週一回ミーティングを自分たちで開いて、先生がいなくてもミーティングしたり、先生のいない時でも練習集中させてやるうみたいな、(中略) そうなんかこんなやっっているうちに、皆、俺に付いてきてくれるようになりました。
		信念の形成(16)	なんか、それからですね。しっかりしなくちゃ、しっかりしなくちゃって思うようになったのは。

Inf.	トピック	コード名(No.)	発言の内容
C	顧問の死去	予期せぬ事態(17)	その次の日に、姿がなくなって、で、全校集合があって、その時に聞いて、突然で、みんな大泣きで、理由が、その自殺っていうのを聞いて、ちょっと納得いかなくて、
		配慮的対人理解(18)	有名な先輩を指導して、日本一にさせたっていうのがあって、それで、全てやることは終えたって感じで、亡くならはったのかなって思って。
		同一性の強化(19)	先生の分までがんばろうと思ったし、先生に認めてもらえる選手になりたいと思ったし、(中略)体育の教員になりたいと思出したのもその頃からなんです。
		同一化(20)	あんなふうになりたいなって、いつも思っていました。
D	キャプテンに指名されたこと	自己変容の自覚(21)	それまではやっぱり、遊びというか、あんまり真剣にやっていなくて、それで、自分も大分変わったと思うんですね。
		積極的関与(22)	自分たちで部活を作っていくかなくちゃいけないって、それで、やっぱり後輩の前で恥ずかしいことはできないなど思って、
		宣言的関与(23)	キャプテンに指名してもらった以上、やっぱり自分のすべきことはやらないとだめだし、皆にやっぱりそういう示しとか、つかなくなるんでもう本当に真剣にやらなだめだなと思った。
		改心(24)	先輩は大きい目で見ていて、やっぱり僕が一番中心になることができ、やっぱり、言うことも言えるし、判断してくれたと思うんで、それで、僕もすごい、全部改めなきゃなって思って、すごい反省して、こころ入れ換えようと思いました。
		自戒(25)	その時に、やっぱり喧嘩したことも、先輩のことをよく考えていくと、自分もやっぱり、少し、何かいろいろ言い方もあったらうし、すごい、悪いことしたなって思って
E	退部の危機	関係の深化(26)	そこから、やっぱり、いろんなことを話せる先輩になって、すごい、仲良くなったっていうか、すごい信頼できる関係になりました。
		自戒の照れ(27)	クラスの友達をもめ事があって、ちょっと喧嘩みたいになったんですけど。要は、手を出しちゃったんです。
		叱責による反省(28)	それで部屋に呼び出されて、退部だとか言われたんですけど、すごい謝って、反省して、それで頭を坊主にして、みんなの前にも立って謝って、それで、一応、皆にも認めてもらったんで、退部はなくなったんですけど。
		叱責による反省(29)	先生に、謝りに行ったときは、まず最初に自分がやったことについて聞かれて、それから1時間くらい説教されて、ずっと謝り続けていて、自分の部活に対する気持ちとか全部しゃべって、それで最後に何とか、少しは認められるようになって、まあ、許してもらったって感じですね。
F	受験失敗	態度の改善(30)	その後は、私生活とかでも、なんか、ちょっとでも変なことすると先生の耳にすぐ入るぞっとか、そういう感じ言われていたので、(中略)その、退部になりそうなきにも毎日私生活もきっちりと、遅刻もしないようにしてました。(中略)それから、自分がしっかりしてきたように思います。
		挫折感(31)	悔しかったですね。
		生活様式の拡丸(32)	今まで、ずっと決められた、あの環境っていうか、その、学校に行ったり、するのしか知らなかったんで、もう一日を自由に使えるっていうか、そういうのがすごく新鮮だったっていうか、それで、まあ、自分の好きなことを勉強したり、バイトしたりして、
		自己の深化(33)	気持ちの整理がついたっていうか、それで、色々考えることもできるようになりました。
		積極的意味づけ(34)	今になって、浪人しておいて良かったなって思う。
		積極的意味づけ(35)	まあ、落ちて浪人したっていうことが、結果的に好い方に行っているとは思いますが。
G	生徒会とスランプ	自己の深化(36)	物事を落ち着いて、しっかり考えられるようになりましたから。(中略)少しは大人になったんちゃうかな。
		配慮的対人理解(37)	俺はお前がいいと思うって言われたんですね。(中略)すごい言われたんで、先生、私のこと、そこまで考えてくれてるんだと思って、私もちょっと考えて、
		方向転換(38)	やっぱり、立候補することに決めたいですよ。
		積極的関与(39)	行事は、やっぱ、なんか、自分が生徒会を動かしている感じがして、何かと協力してくれる人もいるし、生徒会内の人間関係で悩んだりしましたけど、遣り甲斐はありましたね。はい。コツコツやったことが行事とかで成功したときは、めちゃくちゃ感動ありました。
		対処様式の拡丸(40)	スランプなんです。(中略)生徒会、やっているうちに卓球の方が疎かになってしまっで、なかなかスランプから抜け出せなかったんですけど、(中略)でも、コツコツやることを生徒会で学んだんで、やっぱコツコツやり続けて、それがきっかけかなんかで、スランプを脱出したんですよ。
未織(41)	でも、この時期のスランプがなければなって悔いが残っているんです。		

Table 2 生成されたカテゴリーとカテゴリーグループ

コード名 (No.)	inf.	カテゴリー	カテゴリーグループ	コード名 (No.)	inf.	カテゴリー	カテゴリーグループ	
性分の自覚 (1)	A	自己への 気づき	自己の変容	友情の形成 (2)	A	関係の形成 ・深化	関係の変化	
有頂天の自覚 (9)	B			体験の共有化 (3)	A			
自己変容の自覚 (21)	D			関係の深化 (26)	D			
改心 (24)	D	自己深化		チームメイトへの 働きかけ (15)	B			
自己の深化 (33)	F			重要な他者の認知 (4)	A			
自己の深化 (36)	F	信念の形成 ・強化		配慮的対人理解 (18)	C	他者理解		
強い信念 (7)	A			配慮的対人理解 (37)	G			
信念の形成 (16)	B			支援的關係 (12)	B			
同一性の強化 (19)	C	積極的 意味づけ		行為の拡大	挫折体験 (5)	A		否定的感情
同一化 (20)	C				挫折感 (31)	F		
積極的意味づけ (34)	F	予期せぬ事態 (17)	C					
積極的意味づけ (35)	F	自我関与	未練 (41)		G	否定的態度		
宣言的関与 (14)	B		マイナス思考 (6)		A			
宣言的関与 (23)	D		マイナス思考 (11)		B			
積極的関与 (13)	B	行動の改善	叱責による反省 (10)		B	叱責による 反省		
積極的関与 (22)	D		叱責による反省 (28)		E			
積極的関与 (39)	G		叱責による反省 (29)		E			
態度の改善 (30)	E	行動の広がり	自戒 (25)		D	深い反省		
方向転換 (38)	G		自戒の照れ (27)	E				
生活様式の拡大 (32)	F							
対処様式の拡大 (40)	G							

下、文中には[]に示す)を付した(Table 1)。次に、そのコードを整理し、精緻化し、13個のカテゴリー(以下、[]に示す)を生成した。続いて、これらのカテゴリーの精緻化を行った。そこでは、各カテゴリーの連関に基づき、再編成を繰り返した結果、5つのカテゴリーグループ(以下、【 】に示す)を生成した(Table 2)。以下に、4つの【カテゴリーグループ】に含まれる[カテゴリー]とその[コード]、そして、そのような分類に至った判断基準を詳述する。

まず、【自己の変容】というカテゴリーグループは、4つのカテゴリーから構成される。[自己への気づき]は、[性分の自覚][有頂天の自覚][自己変容の自覚]など、自分のありのままの姿や自己の変化に気づいたことを語り、[自己深化]は、[改心][自己の深化]など、自己の改善が必要であることや落ち着きを獲得したことを語っていた。また、[信念の形成・強化]は、[強い信念][信念の形成][同一性の強化][同一化]など、強い信念から困難を克服したことを語り、[積

極的意味づけ]は、[積極的意味づけ]で、かつて否定的であった自己を肯定的な自己へと語り直していた。このように、4つのカテゴリーは、転機を介して、自己の内面の転換を図ったことを意味しており、【自己の変容】としてグループ化した。

次の【行為の拡大】というカテゴリーグループは、3つのカテゴリーから構成される。[自我関与]は、[宣言的関与][積極的関与]など、重要な役割を担うことで積極的に取り組んでいったことを語り、[行動の改善]は、[行動の改善][方向転換]など、それまでの自己の行動を改めたことを語り、そして、[行動の広がり]は、[生活様式の拡大][対処様式の拡大]など、それまでとは異なる行動範囲やその様式に至ったことを語っていた。すなわち、主体的な行為によって生活世界の広がりを来たしていることから、【行為の拡大】としてグループ化した。

そして、【関係の変化】というカテゴリーグループは、2つのカテゴリーから構成される。[関係の形成・深化]は、[友情の形成]

[体験の共有化][関係の深化][チームメイトへの働きかけ]など、友情関係形成したり、他者との信頼関係を構築したりしたことを語り、〔他者理解〕は、〔重要な他者の認知〕[配慮的人間理解][支援的關係]など、他者に対する理解が促されたことを語っていた。これらのカテゴリーは、転機をきっかけにして他者との関係が変化したことを意味しており、【関係の変化】としてグループ化した。

最後に、【自戒の思い】というカテゴリーグループは、4つのカテゴリーから構成される。〔否定的感情〕は、〔挫折体験〕[挫折感][予期せぬ事態][未練]など、挫折体験や突然の不幸など、程度に差はあるにしても悲しい思いをしたことを語り、〔否定的態度〕は、〔マイナス思考〕で、自分が置かれた立場に対して、マイナス思考をもって対応したことを語っていた。そして、〔叱責による反省〕は、コードからそのまま採用したが、指導者からの叱責を受け、自己のそれまでの行為や取り組みを大きく反省したことを語り、〔深い反省〕では、〔自戒〕[自戒の照れ]など、自己の過ちを後悔していることを語っていた。これらのカテゴリーは、転機の中にあって、自己にとって否定的な意味合いが強いことから、【自戒の思い】としてグループ化した。

上記のことから、本研究で設定した「スポーツ大学1年生は、これまで経験してきた転機をどのように捉えているのか」というRQに対して、4つの枠組み（自己の変容、行為の拡大、関係の変化、自戒の思い）から転機を捉えているというひとつの解釈的基準が得られたことになる。

総合的な考察

ここでは、上述の基礎的なカテゴリーの生成と精緻化の作業を進める中で、著者が気づいた点を挙げ、これを仮説的知見とし、明らかにした。また、今後の展望について触れた。

仮説的知見：スポーツ大学1年生は、これ

まで経験してきた転機をどのように捉えているのかについて、転機は、自己の内面の変化ばかりでなく、外界との関わりの変化を伴う、否定的な経験を含んだ転機に対しては、自戒の思い（未練や後悔）を伴う、転機によって人間関係が改善された背景で、他者の気持ちを汲んであげるといった共感のスキルが獲得されている、転機による行動様式の変化には、自分の置かれた役割への気づきから自我関与していくプロセスがみられる、という4つの仮説的知見が見出された。

まず、は、カテゴリーグループに着目した結果であり、転機には、自己の内面を変化させる側面、すなわち【自己の変容】と、外界との関わりを変化させる側面、すなわち【行為の拡大】と【関係の変化】に大別できるという、いわば「転機の構造」として位置づけられると考えた。次に、は、LLとカテゴリーグループを整理している中で導き出されており、特に、大きく反省を迫られた転機には、「思い出すのも恥ずかしい」や「あの時、こうしておけば良かった」といった後悔や未練など、自戒の思いが伴っていたことに着目した。そして、では、〔配慮的人間理解〕のコードに着目した結果、対人関係の形成・深化が進んだ背景には、相手に対する共感的理解が促されたことによるものではないかと考えた。最後に、は、〔宣言的関与〕と〔積極的関与〕のコードに着目した結果、キャプテンや生徒会長など自分の置かれた役割の重要性に気づいたことから、自己の取り組みを正し、強化していったことが読み取れた。

特に、については、転機の構造として他者と相互作用について語りが含まれていることが確認できる。すなわち、自己転換の契機としての転機を主題としていた従来の研究の流れに対して、関係論的考察の必要性を示唆する豊かな知見といえよう。これには、関係論的アイデンティティ（杉村、1998；岡本、1995）の立場からのモデル生成が有効かも知

れない。

今後の展望：本研究には，内容面の課題と方法論的課題が残された。内容面については，「転機」の捉え方について既存の理論に準拠することなく分析を試みたが，関係論的アイデンティティ論との関連も考慮すべきであることが示唆された。今後は，これ以外の有効な理論的背景を検討しつつ，仮説的モデルの生成を図らねばならない。一方，方法論的課題であるが，これらの仮説的知見には，質的研究一般においてしばしば指摘される「結果の一般化可能性 (generalizability)」(Flick, 1995) の問題が残されている。すなわち，本研究において導き出された仮説的知見が，特定の条件下のみ一般化できるか否かについては，引き続き，理論的サンプリングやカテゴリーの精緻化を繰り返し検討していくことが不可欠であろう。

本研究は，GTAという方法を参考にしながら，「スポーツ大学1年生はこれまで経験してきた転機をどのように捉えているのか」というRQの解決にむけて質的にアプローチした。その結果，4つの枠組み(【自己の変容】【行為の拡大】【関係の変化】【自戒の思い】)と4つの仮説的知見を見出した。しかしながら，Flick (1995) のいう「理論的飽和 (theoretical saturation)」のレベルには程遠い感を拭えない。今後も，各カテゴリーが理論的な飽和に至るまで，サンプリングを続けていく必要がある。多くの課題が散在しつつも，それをひとつひとつ整理し，了解的な理解を中心とする質的研究法をさらに研鑽し，スポーツ経験と個の意味といったテーマに取り組んでいきたいと考えている。

引用文献

Flick, U. 1995 Qualitative forschung, Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Verlag. (フリック U. 2002 質的研究法入門 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子 (訳) 春秋社.)
原田杏子 2003 人はどのように他者の悩みを

きくのか - グラウンデッド・セオリー・アプローチによる発話カテゴリーの生成 -, 教育心理学研究51 : 54-64.

石井源信 1994 スポーツキャリアパターンを規定する心理的特性 - 有能感, 勝利志向性, 目標の種類, 結果の予測について 青少年のスポーツ参加に関する研究 (第2報) 平成6年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 No. 日本体育協会スポーツ科学専門委員会 : 80-87.

加賀秀夫・石井源信・杉原隆・深見和男 1992 調査と考察 (2) : 心理的側面 中高年のスポーツ参加に関する社会学的・心理学的研究 (第2報) 平成4年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告No. 日本体育協会スポーツ科学専門委員会 : 50-90.

河村茂雄 2000 心のライフライン - 気づかなかった自分を発見する 誠信書房.

木下康 2003 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂.

Kirk, J., & Miller, M. 1986 Reliability and validity in qualitative research. Beverly Hills, CA: Sage.

Levinson, D. J. 1978 The seasons of a man's life. The Starling Lord Agency: New York. (レビンソン D. J. 1992 ライフサイクルの心理学 南博 (訳) 講談社学術文庫)

岡本祐子 1995 成人期のアイデンティティ発達における「関係性」の側面について, 広島大学教育学部紀要 (第二部), 44 : 145-154.

中込四郎 2004 スポーツカウンセリング スポーツ選手の心理的問題, 日本スポーツ心理学会 (編) 最新スポーツ心理学 その軌跡と展望 : 231-242.

水野将樹 2004 青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成, 教育心理学研究52 : 170-185.

Strauss, A.L., & Corbin, J. 1990 Basics of qualitative research: grounded theory procedures and techniques, Sage. (ストラウス A. L.・コーピン J. 南裕子 (監訳) 1999 質的研究の基礎 - グラウンデッド・セオリーの技法と手順 医学書院.)

- 杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティ形成：関係性の観点からのとらえ直し, 発達心理学研究 9(1): 45-55.
- 杉浦健 2004a 転機の経験を通したスポーツ選手の心理的成長プロセスについてのナラティブ研究 スポーツ心理学研究31: 23-34.
- 杉浦健 2004b 転機の心理学 ナカニシヤ出版.
- 豊田則成 2001 競技引退に伴う心理的問題と対策 体育の科学51: 368-373.
- 豊田則成・松田保 2003 元トップアスリートの転機についての語り びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要 1: 117-131.
- 豊田則成・中込四郎 2000 競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討 体育学研究45: 315-332.
- 筒井清次郎・杉原隆・加賀秀夫・石井源信・深見和男・杉山哲司 1996 スポーツキャリアパターンを規定する心理学的要因 Self-efficacy Modelを中心に 体育学研究40: 359-370.

付 記

本研究の一部は、2003年度学内共同研究費の補助を受け実施された。

